

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 8 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00128

研究課題名（和文）フーゴ・リーマンの音楽理論の学際性と受容に関する歴史的研究

研究課題名（英文）Historical Study on Interdisciplinarity and Reception in Hugo Riemann's Music Theory

研究代表者

西田 紘子（Nishida, Hiroko）

九州大学・芸術工学研究院・准教授

研究者番号：30545108

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：フーゴ・リーマン（Hugo Riemann, 1849-1919）は、現代の機能と声理論の礎を築いたドイツの音楽理論家である。近年、欧米やアジア圏ではリーマンの和声理論や受容史に対する関心が高まっている。そこで本研究は、リーマンの和声理論における学際性と、今日に至る影響力の要因の一端を明らかにすることを目的とした。具体的には（1）リーマンの和声理論が英語・フランス語圏に受容される際に生じた変容、（2）リーマン生前の音楽理論と音響生理学・音響心理学との関連、（3）日本に和声学が導入される黎明期におけるリーマンの和声理論の位置づけ、という3点から受容史を編み直した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第一に、音楽理論という、日本では専門家の少ない分野に従事し、昨今重視されている「学際性」が19世紀後半から20世紀前半にかけてどのような特徴を有していたのかを明らかにした点に意義がある。我が国で近年高まりつつある音楽理論への関心に歴史的視点を付与することは、音楽研究が今後発展するための一助となる。

第二に、研究協力者らと連携して、フランス語圏とドイツ語圏、近代日本の受容を合わせみることによって、和声諸概念の変容のグローバルな動態の一端が浮き彫りになった点に意義がある。これにより、これまで各国個別に論じられる傾向にあった音楽理論史の方法に一石を投じることができた。

研究成果の概要（英文）：Hugo Riemann (1849-1919) is a music theorist who founded the modern theory of harmony based on the functions. Recently, scholars in the Western as well as the Asian countries have become more interested in his theory of harmony and its receptions. In this context, this study aimed to elucidate the interdisciplinarity in Riemann's harmony of theory and its influence to the present day. In particular, this study reconstructed the reception history on Riemann from three perspectives: 1. the transformations observed in the reception of Riemann's harmony theory into English- and French-speaking areas, 2. the relationship between his music theory and Tonphysiologie/Tonpsychologie in his lifetime, and 3. how his theory of harmony was received among other texts on Waseigaku in modern Japan.

研究分野：音楽学

キーワード：音楽理論 音楽美学 フーゴ・リーマン 音楽理論史 学際性 科学史 受容 和声理論

1. 研究開始当初の背景

1980年代以降の音楽理論学界では、長らく主流をなしてきた「シェンカー風理論 Schenkerian Theory」に代わり、ドイツの音楽理論家フーゴ・リーマン (Hugo Riemann, 1849-1919) の和声理論を部分的に復興させた「ネオ・リーマン理論 Neo-Riemannian Theory」が勃興している。シェンカー風理論は、後期ロマン主義の半音階を駆使した音楽や、20世紀以降の無調音楽の分析には適用しにくいという欠点がある。それに対してネオ・リーマン理論に基づく分析法は、半音階的ないし非調性的な音楽に適用しうるものとして、近年ではハリウッド映画音楽にまで分析対象を拡げている[1]。

一方で、2000年代以降、複数の分析法どうしの関係をめぐる方法論的研究や、理論の歴史研究が活発になっている。とくに、現在の二大分析法とみなされているシェンカー風理論とネオ・リーマン理論の関係は、アメリカの理論専門誌で特集が組まれるなど、ホットな論点となっている ([2]を参照)。また、ネオ・リーマン理論が19世紀後半のリーマンの和声概念をどのように領有したかという音楽理論史の立場から、国を超えたグローバルな和声理論史の構築にも注目が集まっている ([3]を参照)。

このような状況において現在、トニック・ドミナント・サブドミナント (TDS) という和声の「機能」概念を確立したリーマンは、世界的に重要な音楽理論家とみなされている。その著作は生前から各国語に翻訳され、今なお強い影響力を有するものの、「なぜそのような理論が成立し、影響力をもつに至ったか」はいまだ解明されていない。研究代表者は、音楽理論史や和声に関する議論を日本においても活性化させるため、リーマンの和声理論を一般に解説し、重要な論考を翻訳する試み[4]を進めてきた。

一方で、日本をはじめアジア圏では、西洋音楽の受容黎明期の研究は進みつつある。だが、日本の「音楽学」黎明期にリーマンの『音楽学提要 *Grundriß der Musikwissenschaft*』(1908年)が参考にされたことは記述されているものの[5][6]、和声学の導入期(明治期から昭和初期)においてリーマンの和声理論がどのように受容されたかの詳細は不明であった。

その理由として、以下の2点が考えられる。

- (i) リーマンの著作量が膨大であり、関連する分野が音生理学・音心理学、音楽美学、数学など多岐にわたること (→当時の音楽理論分野の特殊性)
- (ii) リーマンの理論や記述の体系が高度に複雑であること (→リーマン自身の特殊性)

そこで、これらの課題を解決する足場を築くべく、本研究では以下の3つの問いを立てた。

- ①リーマンの音楽理論は、当時の音生理学・音心理学をはじめとする関連諸分野といかなる関係を結びながら成立したのか (→リーマンの音楽理論の学際性)
- ②リーマンの音楽理論が19世紀後半から20世紀前半に英語やフランス語に翻訳される際に、いかなる概念変容が生じたのか (→ヨーロッパにおけるリーマンの受容)
- ③日本に和声学が導入される黎明期(明治から昭和初期)に、リーマンの音楽理論はどのような役割を果たしたのか (→日本におけるリーマンの受容)

参考文献

- [1] Lehman, Frank. *Hollywood Harmony*. Oxford: Oxford University Press, 2018.
- [2] 西田紘子「ネオ・リーマン理論とシェンカー理論——解釈と方法をめぐって」『美学』第250巻、121-132頁、2017年。
- [3] 西田紘子「ネオ・リーマン理論のリーマン受容にみる概念変容——「進行／転換」と「PLR変形」を中心に」『音楽学』第65号1巻、1-17頁、2019年。
- [4] フーゴ・リーマン(著)、西田紘子(抄訳)「〈音想像論〉の着想」『音楽を通して世界を考える——東京藝術大学音楽学部楽理科土田英三郎ゼミ有志論集土田英三郎退職記念論文集』東京藝術大学出版会、292-313頁、2020年。
- [5] 鈴木聖子『〈雅楽〉の誕生——田辺尚雄が見た大東亜の響き』春秋社、26-28頁、2019年。
- [6] 仲万美子「日本における「音楽研究」から「音楽学」への移行の足跡」『音楽学』第35巻1号、44-53頁、1989年。

2. 研究の目的

以上の問いに答えるべく、本研究は、リーマンの和声理論における学際性と、今日に至る影響力の要因の一端を明らかにすることを目的とした。具体的には、以下の3点から受容史を編み直すことを目指した。

- (1) リーマン生前の音楽理論と音響学等の隣接分野との関連
- (2) リーマンの音楽理論が英語・フランス語に翻訳される過程で生じた概念変容

(3) 日本に和声学が導入される黎明期におけるリーマンの音楽理論の位置づけ

3. 研究の方法

研究期間は3年間とし、以下のような手順に沿って行った。ただし、コロナ禍の影響で、予定していたヨーロッパでの史料調査や現地へ赴いての国際学会発表を予定年度に実行することはできなかった。そのため、実際には2020年度と2021年度の計画は順序を入れ替えて遂行した。以下では、実際の実施順に沿って記述する。

〈2020年度〉リーマンの音楽理論が英語・フランス語圏に受容される際に生じた変容

2020年度は、リーマンの音楽理論が英語圏（イギリス）とフランス語圏に受容される際に生じた変容を対象として調査を進めた。その受容過程のうち、リーマンの生前から影響力を誇った『音楽事典 *Musik-Lexikon*』（1882年より版を重ねる）をとり上げ、音楽理論上の項目の変遷と翻訳時の特徴に焦点をあてるという方法をとった。リーマンの存命中、『音楽事典』のドイツ語版は8つの版を重ねた。また、1890年代のうちに英語とフランス語に翻訳され始め、1900年代に入ってこれらの翻訳版も増版された。

以上のリーマン存命中の版について、一次史料を基に単語レベルで原語と翻訳の照合を行ってデータベース化し、ドイツ語から英語・フランス語への翻訳に見出される特徴を比較し、その思想的背景を考察した。英語圏やフランス語圏における翻訳時の特徴や、3か国語間の影響関係を検証することで、理論概念の国際化の過程を、具体例を通して明らかにした。

〈2021年度〉リーマン生前の音楽理論と音響物理学・音響心理学との関連

2021年度は、リーマン自身の音楽理論の受容および学際性を対象とした。リーマンの和声理論については19世紀後半の「論理の追求」という特色に注目が集まってきたが、20世紀に入った晩年の（数学的論理から心理学的想像への）転換以降については研究が進んでいない。晩年のリーマンは、ヘルムホルツやシュトゥンプの理論を批判し、ゲーザ・レーヴェス等の音響心理学者と論争をくり広げた。これらの議論内容の妥当性を精査し、当時のリーマンやその周辺にとって「学際性」とはいかなるものであったかを検討するという方法をとった。

具体的には、以下の5点から研究を行った。

- ①リーマンが編纂した『音楽事典』（1882年～）に着眼し、英語圏やフランス語圏における翻訳時の特徴や影響関係を検討することで、理論概念のグローバル化の過程を、具体例を通して明らかにした。
- ②この『音楽事典』から和声理論に関する重要概念を抽出し、生前の版（初版から第8版）においてこれらの概念がどのように変容しているか、またその変容の過程において音響学や音心理学といった隣接学問分野の知とリーマンの音楽理論がいかなる相互作用をみせているかを考察した。
- ③晩年の論考「〈音想像〉論の着想」（1916年）や1910年代に展開された音心理学者との論争をとり上げ、論争を通してリーマンが音心理学と音楽理論の関係をどのように捉え直したかについて明らかにした。
- ④同音楽事典や『音楽学提要』（1908年）などのリーマンの主要著作群において、リーマンが音楽理論と音楽美学、音心理学や音生理学といった当時の諸分野・諸領域をどのように関係づけていたかについて分析し、音楽理論や音楽史、音楽美学を専門とする研究者とともに、方法論に関するシンポジウムを実施した。
- ⑤音楽理論・美学に関する専門書の翻訳を進めた。

〈2022年度〉日本における和声学導入期におけるリーマンの和声理論の位置づけ

最終年度は、明治期から昭和初期にかけて日本で出版された和声学の書籍や雑誌記事、東京藝術大学附属図書館に所蔵されている作曲学等の授業史料（この調査は研究協力者が担当した）という複数の媒体を対象に、リーマンの音楽理論、とくに和声理論に言及しているものを調査した。調査に際しては、全国の大学図書館や東京文化会館音楽資料室、国立国会図書館デジタルコレクションなどを活用した。そのうえで、該当する文献史料を一覧にし、文献の形態やリーマンにどのように言及しているかについての特徴を抽出するという方法をとった。これにより、日本人がリーマンの音楽著述、とりわけ彼の音楽理論の何を受容し領有したのか、すなわち西洋音楽学に対する日本人の受容の一端を、「音楽理論」という一事例から明らかにした。

4. 研究成果

〈2020年度〉

上述のとおり、英語圏やフランス語圏における翻訳時の特徴や、3か国語間の影響関係を検証することで、理論概念の国際化の過程を、具体例を通して明らかにするという方法により、これまで各国個別に論じられる傾向にあった音楽理論史の方法に一石を投じることができた。成果発表として、ドイツ語版の変遷については第71回美学会全国大会で、翻訳との比較については研究協力者とともに日本音楽学会第71回全国大会で口頭研究発表を行った。また、リーマンの和声理論に関連する研究論文（英語）を公表した。

また、関連成果として、これまでの研究実績を踏まえて、『美学事典』において関連領域の項

目を執筆した。

〈2021 年度〉

上述のとおり、リーマンが編纂した『音楽事典』(1882 年～)に着眼し、英語圏やフランス語圏における翻訳時の特徴や影響関係を検討することで、理論概念のグローバル化の過程を、具体例を通して明らかにした成果は、フランスにおけるリーマン受容を専門とする研究者とともに共著論文というかたちで発表された。

また、この『音楽事典』において和声理論に関する重要概念がどのように変容したか、その程において音響学や音心理学といった隣接学問分野の知とリーマンの音楽理論がいかなる相互作用をみせたかを考察した成果は、前年度に行った口頭研究発表の内容を改良するかたちで、研究論文として発表された。

そして、晩年に展開された音心理学者との論争をとり上げ、論争を通してリーマンが音心理学と音楽理論の関係をどのように捉え直したかについては、国際学会(10th European Music Analysis Conference)において発表を行い、年度末に論文を準備した。

さらに、リーマンの主要著作群において、リーマンが音楽理論と音楽美学、音心理学や音生理学といった当時の諸分野・諸領域をどのように関係づけていたかについて分析した成果については、音楽理論や音楽史、音楽美学、科学史を専門とする研究者とともに実施した日本音楽学会第 72 回全国大会のシンポジウムにおいて口頭発表された。このシンポジウムの質疑等から得られた知見を発展させるかたちで、当該年度後期には論文集の準備を進めた。

そのほか、関連研究として、音楽理論・美学に関する専門書の翻訳を進めた。

最後に、本研究を開始する前より進めてきた、音楽理論と演奏の学際性に関わる国際共同研究の成果が、英語共著論文が論文集というかたちで出版された。

〈2022 年度〉

上述のとおり、研究協力者とともに「日本における和声学導入期におけるリーマンの和声理論の位置づけ」を調査した成果のうち、和声学全体の傾向と変遷については第 73 回美学会全国大会で調査の成果を発表し、リーマンの和声理論の受容については研究協力者とともに国際学会(The 6th Biennial Conference of IMSEA)で発表された。これらについてはそれぞれ論文としてまとめ、投稿を準備した。

また、日本音楽学会 2022 年度支部横断企画として、2023 年 3 月に学術シンポジウム&コンサート「近代日本と音楽理論」を東京藝術大学で開催し、コーディネーターを務めるとともに、これまでの研究成果を発表した。このシンポジウムは、関連した国際シンポジウムと同日開催したため、海外からの参加者とも議論することができた。

最後に、前年度のシンポジウムを発展させた 10 名の執筆者による書籍の編集作業を、年間を通して進め、完成させ、『音楽と心の科学史——音楽学と心理学が交差するとき』として春秋社より 2023 年 4 月に出版した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 西田紘子・安川智子	4. 巻 26
2. 論文標題 音楽理論上の術語の伝播過程における翻訳とその影響関係 フーゴ・リーマン『音楽事典』の独・英・仏語版を例に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北里大学一般教育紀要	6. 最初と最後の頁 21, 41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20700/kitasatoclas.26.0_21	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西田紘子	4. 巻 72(2)
2. 論文標題 フーゴ・リーマンの『音楽事典』にみる概念変容と隣接学問分野との相互作用 和声理論を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美学	6. 最初と最後の頁 48, 59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hiroko Nishida	4. 巻 23-24
2. 論文標題 Neo-Riemannian and Schenkerian Theories: Priority of Interpretation or Method	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Aesthetics	6. 最初と最後の頁 1,13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 西田紘子
2. 発表標題 日本における西欧の和声理論の受容と和声学の展開 訳語と和声記号を中心に
3. 学会等名 第73回美学会全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Hiroko Nishida, Maho Nakatsuji
2. 発表標題 Reception of Hugo Riemann's Theory of Functional Harmony in Japan
3. 学会等名 The 6th Biennial Conference of IMSEA (The Regional Association for East Asia of the International Musicological Society) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西田紘子 (発表者兼コーディネーター)
2. 発表標題 フーゴー・リーマン周辺にみる日独の音楽理論交流
3. 学会等名 シンポジウム&コンサート「近代日本と西洋音楽理論」(日本音楽学会2022年度支部横断企画)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hiroko Nishida
2. 発表標題 Interdisciplinarity in Hugo Riemann's Music Theory in the 1910s and the 'Harmonic Relatedness'
3. 学会等名 10th European Music Analysis Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小寺未知留・西田紘子・小川将也・源河亨・野家啓一
2. 発表標題 パネル「心理学・音楽理論・美学 変化するメソドロジー」
3. 学会等名 日本音楽学会第72回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西田紘子
2. 発表標題 フーゴ・リーマンの『音楽事典』にみる概念変容と隣接学問分野との相互作用 和声理論を中心に
3. 学会等名 第71回美学会全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西田紘子・安川智子
2. 発表標題 音楽理論上の術語の伝播過程における翻訳とその影響関係 フーゴ・リーマン『音楽事典』の独・英・仏語版を例に
3. 学会等名 日本音楽学会第71回全国大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 西田紘子・小寺未知留（編著）、野家啓一・小川将也・鈴木聖子・田邊健太郎・佐藤典子・木村直弘・森本智志・源河亨	4. 発行年 2023年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 264
3. 書名 音楽と心の科学史 音楽学と心理学が交差するとき	

1. 著者名 マーク・エヴァン・ボンズ著、堀朋平・西田紘子訳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 424
3. 書名 ベートーヴェン症候群 音楽を自伝として聴く	

1. 著者名 Su Yin Mak, Hiroko Nishida, Daisuke Yokomori	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 9
3. 書名 "Agency in ensemble interaction and rehearsal communication," Together in music: Participation, coordination, and creativity in ensembles	

1. 著者名 美学会（編）・西田紘子（分担執筆、他約180名）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 768
3. 書名 「音楽理論（20世紀前半） 自律的美学の極致としてのエネルギーティカー」『美学の事典』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	安川 智子 (Yasukawa Tomoko)		
研究協力者	仲辻 真帆 (Nakatsuji Maho)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------